

師団設置による都市形成への影響に関する一考察

—陸軍第11師団と善通寺市の変遷を事例として—

A Study of The Effect on Urban Formation by The Division Installation
In a Case of The Transition of Zentsuji City and Army's 11th Division

柴田 久**

By Hisashi SHIBATA

要旨：近代における我が国の都市形成を土木史的観点から考える上で軍事との関連を検討することは極めて重要な視点であると考え。本稿では、明治31年に陸軍第11師団の置かれた香川県善通寺市を事例として取り上げ、師団設置が善通寺の都市形成に与えた影響について考察を行った。分析方法としては善通寺市及び師団に関する史料収集に加え陸上自衛隊善通寺駐屯地広報室等へのヒアリング調査を敢行した。成果として第一に、善通寺の近代的都市化は軍事を第一義とする権力思想によって強力に押し進められたこと、第二に師団設置による空間改変と産業構造の変化は善通寺に他地域と異なった軍都独自の社会システムを形成させたこと、第三に善通寺の強権的な都市形成によって師団設置に関われなかった住民が逼迫した村の地租財政の犠牲者として近代化プロセスに埋もれていったこと等を明らかにした。

1. はじめに

(1) 本研究の背景と目的・分析方法

近代日本の歴史は、日清・日露といった戦争の歴史と言っても過言ではないだろう。日本最初の対外戦争である日清戦争で得た賠償金は2億3000万両（当時邦貨3億6000万円）におよび、その約84%は軍事費に使われたとされている。明治以降の戦争に対する防衛施設の設置と推進は、近代土木技術の活用を不可欠とし、その後の都市形成においても多くの影響を及ぼしたと推察される。近代における我が国の都市形成を土木史的観点から考える上で、軍事との関連を検討することは極めて重要な視点ではないだろうか。

以上のような問題意識のもと、本研究では、明治以降に旧陸軍の戦略単位として全国に配備された「師団」の設置について着目する【図-1】。本稿では、明治31年に陸軍第11師団の置かれた香川県善通寺市を事例として取り上げ、師団設置が善通寺の都市形成に与えた影響について考察を行った。分析方法としては、善通寺市及び第11師団に関する史料収集に加え、師団終焉後に配置された現在の陸上自衛隊第2混成団善通寺駐屯地広報室、善通寺市立郷土館、及び「善通寺市史」編さん室室長等へのヒアリング調査を敢行し、検証を行った。

(2) 先行研究と本研究の位置づけ

近代における軍事施設を土木史的観点から考察した先行研究として、星野らの砲台跡地を対象とした研究¹⁾がある。同研究では土木史研究における軍事施設研究がほ

とんど行われていないことを指摘した上で、砲台跡地の全国調査からその現状を把握、分類している。さらに日高らは、主に軍用地の転用である飛行場に注目し、その立地傾向と都市計画上の位置づけについて考察している²⁾。また本稿の関連研究として旧陸軍善通寺第11師団の建築施設群に対する大規模調査³⁾が99年に日本建築学会四国支部によって行われている。この研究では平成13年に国の重要文化財となった師団施設、旧偕行社と第11師団司令部の建築構造・意匠等について詳細な調査結果が報告されている。しかし、本研究が主眼とする師団の設置による広域的な都市形成への影響を考察した土木史研究は未だ管見では見あたらない。

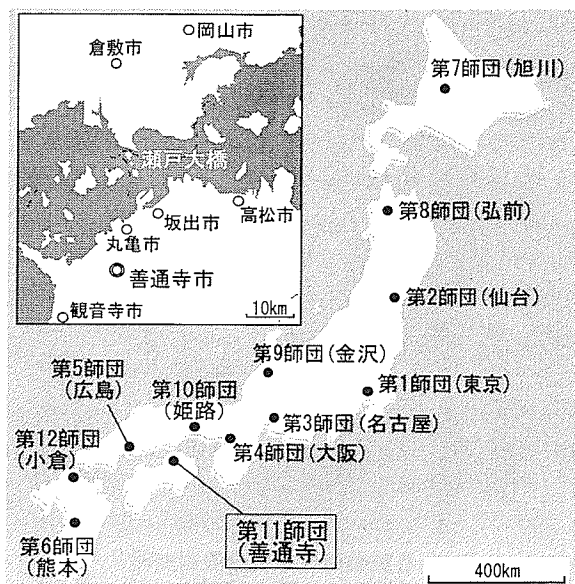


図-1 明治29年当時の師団配置と善通寺市周辺(筆者作成)

*keyword：陸軍第11師団、善通寺市、都市形成史

**正会員 博(工) 四国学院大学社会学部応用社会学科講師
(〒765-8505 香川県善通寺市文京町 3-2-1)

2. 師団設置前の善通寺（近世～明治初期）

善通寺市の母体である善通寺村は、弘法大師空海の生誕地として知られ、「善通寺」という名は空海の父の法名から付けられている。その名の通り、近世の善通寺村は、真言宗善通寺の宗教都市として成立し、四国八十八カ所巡礼や金比羅参りに伴った、善通寺の門前町として栄えてきた。周囲には屏風状に連なった五岳山（香色山・筆の山・我拝師山・中山・火上山）が立ち並び、古来より地元では「出水」と呼ばれる湧き水の存在した香川県下では珍しく水資源の豊かな地域である。明治初期の善通寺周辺は、高松藩、丸亀藩、多度津藩によって統治されていたが、廃藩置県によって多度津藩は倉敷藩と併合され、高松藩と丸亀藩がそれぞれ高松県・丸亀県となっている⁴⁾。香川県が初めて誕生したのは高松県と丸亀県が統合した明治4年（1871年）のことである。しかし、当時の香川県は他県に度々吸収されるなど、政治的に不安定な状況にあった。明治6年には香川県は名東県（現在の徳島県）に併合され、2年後には名東県から分離し再び香川県（第2次）、1年後の明治9年には香川県は廃止され愛媛県に併合されている。愛媛県時代は10年ほど続き、明治21年勅令第7号によって香川県（第3次）が設置されている（これは全国で最も遅く誕生した県である）。図-2は名東県当時の善通寺村略図であるが、図中には当時の戸数が「字〇〇 △戸」と書き込まれている。これによると、後に師団が設置される善通寺境内周辺の戸数は約250程度であり、主な建造物も善通寺以外、

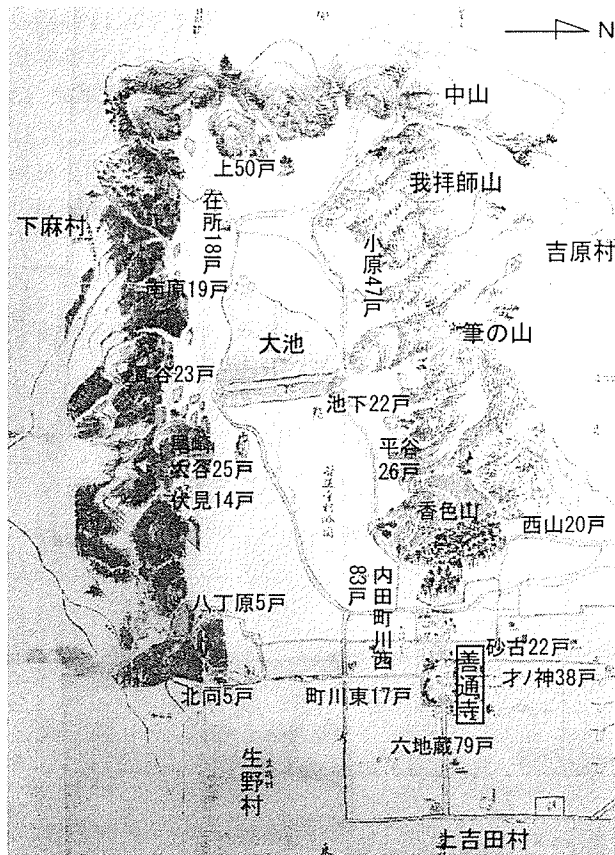


図-2 名東県時代の善通寺村略図
(原図:善通寺市立郷土館蔵に加筆)

存在していないのが分かる。さらにその後、第3次香川県時代、市制・町制が施行された明治23年の翌年、善通寺村の人口は3,099人、戸数は637であった⁵⁾。当時、周辺村で最も人口・戸数の多い竜川村でも3,737、戸数799であり、同年末時点の香川県の人口が675,046、現住戸数131,121であったことを考えると⁶⁾、善通寺村の当時の閑散とした様子が窺えよう。

3. 師団設置による善通寺の変容（M29～T14年）

（1）師団設置の経緯

まず師団設置の経緯について触れておく。明治29年、陸軍平時編制改正に伴い、四国を管区とした第11師団の司令部設置が善通寺村に決定される【表-1】。当時、師団司令部は県庁所在地かこれに次ぐ都市に設置されるのが

表-1 善通寺と第11師団の歴史年表

年	善通寺の歴史	第11師団の歴史
明21 (1888)	丸亀町に讃岐鉄道株式会社が設立 香川県（第3次）が設置される	
明22 (1889)	讃岐鉄道株式会社が多度津を基点として丸亀―琴平間15キロにはじめて汽車を開通	
明23 (1890)	法律で市制・町村制を施行。善通寺、竜川、与北、象郷、吉原、麻野村、吉田村等ができる	
明29 (1896)		陸軍平時編制改正により第11師団司令部が仲多度郡善通寺村に設置が決定
明30 (1897)	・讃岐鉄道。高松―丸亀間開業 ・讃岐電灯株式会社創立	師団設置工事（第1期）
明31 (1898)		・第11師団司令部が開庁する ・遊廓の工事着手
明33 (1900)	高松百十四銀行が善通寺に善通寺支金庫を設置し、国庫金の取り扱いを開始	・善通寺師団韓国守備隊が交代のため多度津に上陸、帰営
明34 (1901)	善通寺町の誕生	
明35 (1902)		第11師団台湾守備隊交代兵が多度津に帰還
明36 (1903)		・偕行社新築落成 ・皇太子（大正天皇）第11師団に御大臨、練兵場で観兵式が挙行
明37 (1904)	讃岐鉄道、山陽鉄道への合併	・日露戦争が起こる ・対露宣戦布告により、第11師団に動員命令が下る
明39 (1906)	鉄道国有法公布により山陽鉄道国有化	練兵場に招魂祭を実施
明41 (1908)		第11師団が奈良県での陸軍特別演習参加
明44 (1911)		満州守備の第11師団司令部が詫間港に帰還
大2 (1913)	高松百十四銀行善通寺支店が開設	
大3 (1914)		第一次世界大戦が勃発
大5 (1916)		第11師団がシベリア出兵のため詫間港出発
大9 (1920)		シベリア派遣隊第11師団が詫間港に帰還
大11 (1922)	琴平参宮鉄道が丸亀―善通寺間に電車が開通 善通寺駅舎大改築落成	善通寺の練兵場で陸軍大演習
大13 (1924)	善通寺において関東大震災大警備演を施行	
大14 (1925)		歩兵第四十三聯隊が徳島に移転

通常とされ、城下町でない片田舎の善通寺村への設置決定は異例であった⁷⁾。設置候補地の一つとして高松市近郊も考えられていたが、「兵營地選定二関スル方針」⁸⁾に準じ、①多度津・詫間等の港湾に近いこと、②湧き水などの地下水源が豊富であったこと、③大麻山、五岳山といった周辺環境が、演習時の軍事訓練に最適であったといわれている⁹⁾。またインタビュー調査によれば、④松山・高知・徳島の各連隊への運輸交通手段の便利さ（各連隊からの等距離地点）にあったことも理由として挙げられていた。当時の師団開設決定に対し、善通寺村に隣接する吉田村では「師団新設ノ結果、戸数ノ繁殖多大ナル今日ニシテ、数年ヲ出デズ一大都市トモナルベキ有望ノ地ニ付」¹⁰⁾とし、師団に対し多大な期待を寄せていたことが分かる。以上のような経緯を辿り、明治31年12月1日、第11師団は善通寺に開庁されることとなる。

（２）地価の高騰と人口増加

明治29年、師団設置の決定を受け、善通寺にまず影響を及ぼしたのは地価の高騰であった。当時の香川新報（四国新聞の前身）には、善通寺村の地価について「一反歩七十圓位の地は三百圓位に上騰せる様報し置きたる處昨今の處にては一反歩六百圓或は七百圓と云う有様にて殆ど手を兼る向も少なからず」とし¹¹⁾、当時の地主による地上げの横暴さが記されている。また、師団用地の買収に伴い、地主が小作への償金を不当な金額で支払うなど、小作者らによる訴訟問題がこの時浮上している。一方、このような状況下、明治30年、師団設置の第一期工事として騎兵第11連隊、歩兵第43連隊、野戦砲兵第11連隊（大正11年に山砲兵第11連隊に改称）及び歩兵第22旅団司令部の各営舎の供用が開始されている【図-3】。また翌31年には第二期工事として施工された輜重兵第11大隊、工兵第11大隊、さらに第11師団司令部の各営舎の整備が完了している。これらの工事期間中、善通寺には師団工事関係者300

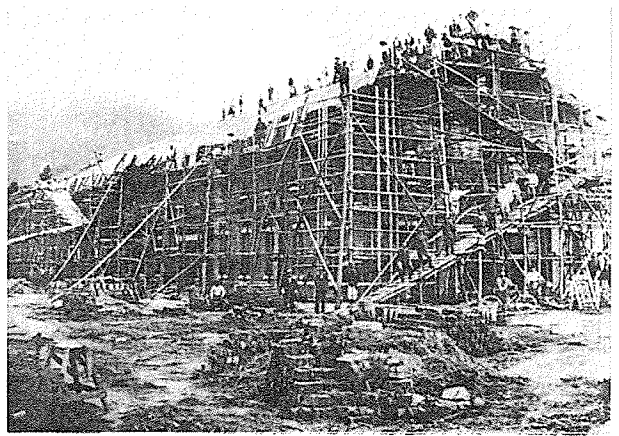


写真-1 旧第十一師団兵器庫建築工事の様子
（陸上自衛隊第2混成団本部乃木資料室所蔵）

～400人が、さらに工事の最も盛んな時期には2000～3000人を越えるほどの人々が流入したとされている【写真-1】。そのため必然的に家屋の需要も高まり、前述した地価「一反歩六百圓或は七百圓」は、明治31年には約2.5倍の1800円までに膨れあがっていた¹²⁾。

（３）軍都善通寺の道路整備

明治31年の師団設置から大正期における善通寺では軍用地を中心に据えた各種インフラ整備が推進されている。表-2¹³⁾は当時の香川県下の道路状況を示したものであるが、これによると明治41年度末時点での国道は4線、そのうち31号（現国道11号線）、32号（現国道319号線）、50号の3線は東京と県庁地を結ぶ整備目的であるのに対し、善通寺線は「東京ヨリ十一師團地ニ達ス」との目的で国道整備がなされているのが分かる。また表-3の国道の改修状況に関するデータを見ると、31号線、51号線と比べ、善通寺線の改修面積5171.11坪に対し、6896.749円と他の国道改修工費より割高であるのが分かる。また道路延長が557.64間で他の国道に比べ短いのに対し、面積は

表-2 明治41年度末における国道の状況（香川縣史第三篇上第三項「土木」より抜粋）

線路名	目的	起地点名	過経地点	終点地名	延長	面積
三十一号線	東京ヨリ愛媛県庁二達ス	丸亀市西平山町字新堀丸亀港	丸亀市龍川村大見村笠田村本山村豊浜町	三豊郡和田村大字箕浦字鳥越	九里十八丁〇七間二分	四万九千三百九十八坪五号八勺
三十二号線	東京ヨリ高知県庁二達ス	仲多度郡龍川村大字金蔵寺字本村三十一号国道	善通寺町琴平町	三豊郡財田村大字財田上字猪ノ鼻	七里〇丁三十七間七分	五万二十坪四合一勺
五十号線	東京ヨリ香川県庁二達ス	丸亀市通町三十一号国道	丸亀市宇多津町坂出町高松市	高松市内町香川県庁	七里十五丁四十六間二分	四万一千三百九十坪九号四勺
善通寺線	東京ヨリ十一師団地ニ達ス	仲多度郡善通寺村大字吉田三十二号国道	善通寺町	仲多度郡善通寺町大字善通寺字六地蔵	九丁二十二間三分	五千二百十四坪八合五勺

表-3 明治21年12月～41年度末における国道の改修状況（香川縣史第三篇上第三項「土木」のデータより筆者作成）

線路名	施工区域	道路			
		延長(間)	面積(坪)	工費(円)	
三十一号線	三豊郡本山村・一ノ谷村	371.70	1115.100	979.180	(計 5778.898)
	仲多度郡吉原村・三豊郡大見村地内鳥坂	2055.40	5138.500	3523.168	
	三豊郡大見村・下高瀬村地内仁地付近	160.60	396.440	772.500	
	三豊郡一ノ谷村・常盤村地内原坂	118.20	295.500	504.050	
五十号線	綾歌郡府中村字綾坂	1289.00	3222.500	2250.000	(計 3463.325)
	丸亀市御供所汐入橋前後	8.00	30.400	73.590	
	綾歌郡賀茂村・府中村地内綾川橋前後	217.42	548.916	799.193	
	香川郡上笠居村字衣掛	114.50	284.098	340.542	
善通寺線	仲多度郡善通寺町	557.64	5171.110	6896.749	(計 6896.749)

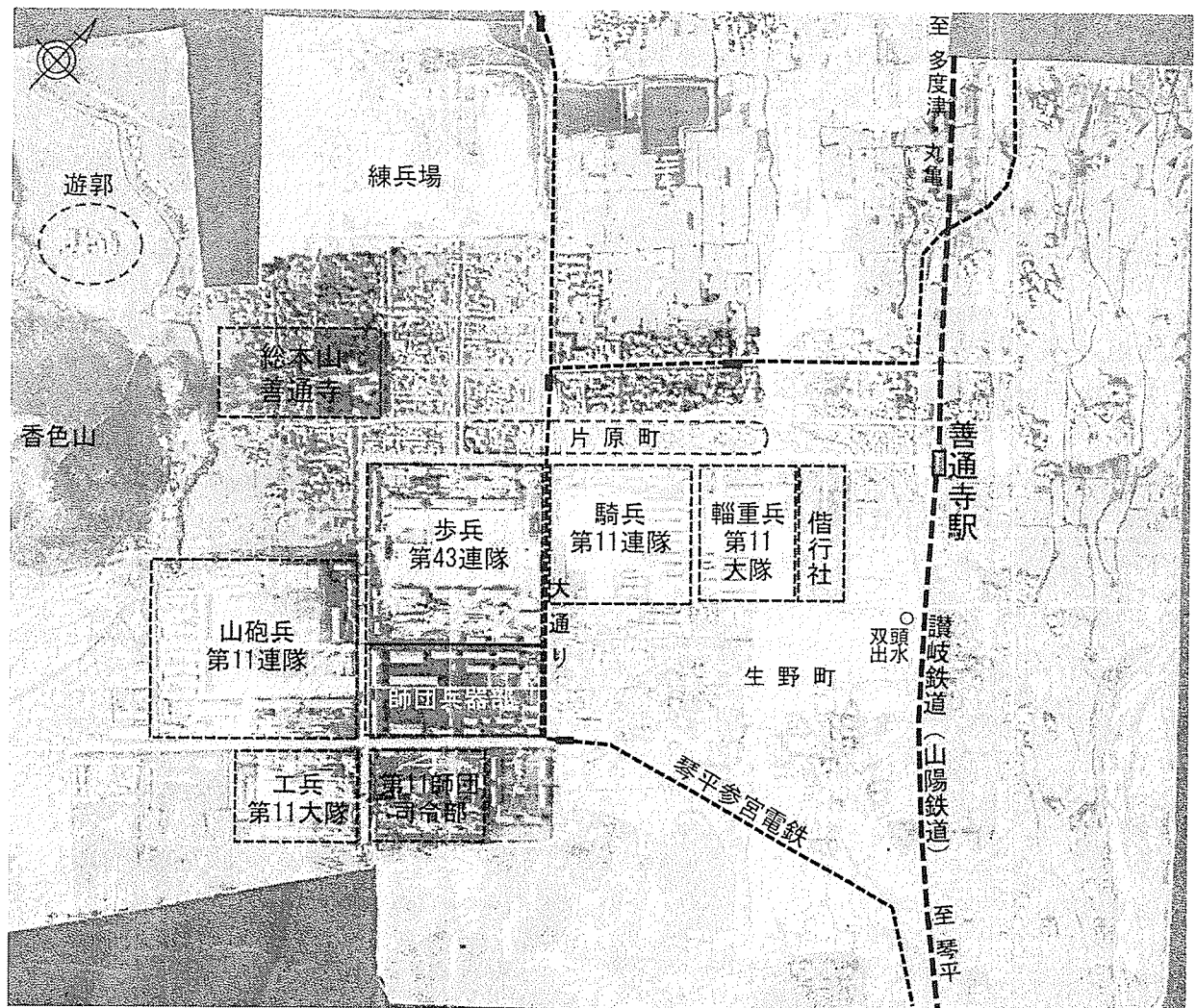


図-3 大正11年陸軍特別大演習統監部飛行隊が撮影した善通寺市街地（原図：善通寺市史付録史料に加筆）

5171.11 坪あり、善通寺線の幅員の広さが看取できる。これらのことから、師団による大規模な軍事輸送に耐えうる道路整備が求められていた当時の善通寺の様子が窺い知れよう【写真-2】。さらに、これら師団を中心とした善通寺の道路形状について、図-3から市街地を縦横に貫く整然とした様子が看取できる。次項で述べる 1922 年に改築された善通寺駅から善通寺境内五重塔南までの直線道路は約 1.2 km に及んでいる。善通寺では名東県時代より人力車が走り、明治 36 年からは師団で廃用となった馬を使用した乗合馬車が大正初期頃まで走行していた¹⁴⁾。その後、乗合自動車（バス）、タクシーなどが往来するようになり、師団の入隊や除隊者の利用で賑わったとされている¹⁵⁾。しかし、当時、道路用地は国家へ寄付（献納）することが当然とされ、加えて広大な道路と激しい軍事輸送ゆえに莫大な復旧費を必要とするなど、善通寺町の土木財政状況は常に火の車であった¹⁶⁾。

（4）陸軍特別大演習に伴う鉄道整備

師団設置によって善通寺の生活基盤を一変させたものとして、讃岐鉄道と琴平参宮電鉄の開通があげられる。明治 39 年に国有化される讃岐鉄道は、明治 22 年に多度津を起点とし、丸亀－琴平間で営業を始めている。開業当時の客車は俗に「マッチ箱」と呼ばれる定員 20 名の小

型のもので¹⁷⁾、金比羅参りの通過地点にある総本山善通寺の参拝客の足として機能していた。しかし大正 11 年、師団設置以来の歴史的な大事件とされる陸軍特別大演習が善通寺町で挙行されたことで、その様相に変化が訪れる。陸軍特別大演習とは西軍（第 5 師団・広島）と東軍（第 11 師団）によって三豊郡と仲多度郡において 3 日間の模擬戦闘が行われたもので、当時の皇太子であった昭和天皇が統監のため来場している。そのため様々な記念事業が行われ、その一つとして讃岐鉄道の善通寺駅が改修されている。前述したように当時の善通寺駅は大変狭く、師団の大移動時などに限界が生じたため、これを機に改修されている。さらに大演習の記念事業の一つとして琴平参宮電鉄（路面電車）が開業の運びとなる。開業当初から路線は徐々に広がり、琴平－坂出間さらに善通寺から多度津へと延長されている。しかし、その路線計画は師団の輜重兵第 11 大隊及び騎兵第 11 大隊から電車の騒音が軍馬の訓練教育上支障を来すとの理由から計画変更を余儀なくされている¹⁸⁾。結果的には師団の軍人や家族の面会人の利便性を重視し市街地を一巡する路線に変更がなされた【図-3】。

（5）師団を取り巻く善通寺の商工業

ここでは、師団設置によってもたらされた産業につい



写真-2 師団兵の行進と善通寺大通りの様子
(吉岡伝三郎所蔵)

て見ていく。まず、明治 30 年に讃岐電灯株式会社の創立が挙げられる。設立直後ではあまり事業発展しなかった同社であるが、善通寺村周辺に位置する竜川村に発電所を設置し、師団開設にあたって電灯等の多大な電力を供給することとなった。その当時、善通寺方面に点灯が要請された際、1000 灯余りが讃岐電灯会社によって新設されている。一方で、師団設置に伴う様々な金融的要請を受け、明治 33 年、高松百十四銀行が善通寺に支金庫を設置、国庫金の取り扱いを開始している。さらに大正 2 年には善通寺支店が設置されている¹⁹⁾。また善通寺駅前の通り（現在の上吉田町と文京町の境の通り）片原町付近では、戦時中、師団指定の旅館が建ち並び、特に、戦局が激しく多くの兵隊が召集された際には、郷土から面会に来る家族の利用で大変賑わったという。また利用客数も多く、師団指定の旅館で部屋数が足りない場合には、間数の多い一般の民家が客を泊めたとされている²⁰⁾。片原町では旅館の他、師団相手の商店が建ち並び、兵隊の記念写真を撮影する写真館や軍靴を修理して販売する店、土産用として杯を売る店など様々な顔ぶれであった。

（6）遊郭の設置を巡る住民紛争

師団が善通寺の都市形成に与えた影響の特徴的な一つとして遊郭地の設置がある。当時、師団工事のため多くの労働者が善通寺に流入したことは前述したとおりであるが、師団に入営する将士たちの流入も考え、善通寺では風紀の乱れが懸念されていた。その結果、「公娼を設けされは思はざるの惨状を極むること無しと言ひ難し」として遊郭の設置が県によって計画されている²¹⁾。しかし、遊郭の設置場所については住民による紛議や分村問題（設置反対ではなく利権の絡んだ設置要求に関する紛議）が引き起こされている。香川新報²²⁾では当時の状況について以下のように報じている。

「村費は師団地たる以前は経常費一千六百円位なりしに一朝師団地となるや大に増加し三十年度の経常費は二千八百餘にて殆と三千圓に垂らんとするに至りざるか却説前期の如く東北部の良知中多く免租地となりし土地の以

前負擔せし經費に恩澤を被らざる西南部山間居住者か多く負擔せざる可からさることなりたるのみならず彼の賑盛の地に住みし多く師団の恩澤を蒙る人民は公民権を有する者すら少なき有様なるを以て戸數割負擔の如きも西南部の住民に比すれば大に少なし慈に於てか遊廓地を西南部の地に相せば之に連れて諸種の商業家も出來掛ければ是非遊廓地は西南部の地に置かんと希望に全地方住民の頭腦は悉く之れありたり」

善通寺村はこれまで村の税収源であった土地の多くを官有地として失い、税収入不足を補填するために地租税督促に係る手数料条例の制定など、村費の増収を図ろうとした。そのため、軍用地として土地売買及び商いの恩恵を受けなかった善通寺西南部の住民の暮らしは貧窮を増し、特に善通寺大池周辺の住民は遊廓を誘致することでこれを回避しようとしたのである。しかし、西南部住民の県に対する再三の請願もむなしく、結果的には「兵舎から近すぎる」との理由から、県が計画当初に候補地としていた善通寺西部砂古裏地区に師団司令部開庁の明治 31 年、工事が着手されている【図-3】（当初は 15 軒の廓があり常時 50 名ほどの娼婦がいたとされている）。遊廓問題の後、県は善通寺村の行財政運営の困難を懸念し、明治 34 年、隣接する吉田村及び麻野村を合併させ、善通寺町を発足させている。

3. 師団終焉と善通寺（T14～S20 年）

（1）昭和初期の善通寺経済

周知の通り、昭和初期の日本経済は大正 10 年に起こった関東大震災を引き金に、昭和 2 年より全国を襲った金融恐慌によって大打撃を受けている。当然、香川県下においても同様の経済情勢であったが、善通寺町は例外として恐慌の影響を直接は受けていない。大正 15 年、琴平銀行の休業や高松百十四銀行善通寺支店の取付けなど、銀行経営の不振が騒ぎとなっているが、善通寺支店の取付け期間はわずか一日という短期間のものであった²³⁾。これにはいくつかの理由が考えられるが、一つは善通寺町の第 2 次産業の割合が低かったことが挙げられる。さらに当時は第 11 師団の存在と善通寺参詣道に沿った商店街が影響し道路に関わる工事が増加するなど、町財政の歳出に見られる公共土木費の金額が比較的多かったために住民が深刻な不況を感じる雰囲気にはなかった²⁴⁾。むしろ善通寺の場合、金融恐慌ではなく、大正 14 年陸軍歩兵第 43 連隊の徳島移動など、連隊縮小や移転などの「軍縮」²⁵⁾が大きな問題であった。

（2）第 11 師団の終焉

昭和 6 年の満州事変を皮切りに、日本は昭和 12 年、日中戦争へと突入、後に太平洋戦争へと続いていく。これに応じて第 11 師団の出動・帰還も頻繁に行われ、昭和初期の善通寺町では、師団に対する町をあげての歓送迎ぶりが多く見られた²⁶⁾。善通寺町内でも昭和 14 年の善通寺銃後奉公会の設置や、「善通寺町税条例」（生活用

品に税をかける)を施行して戦争に協力し、師団が身近にある環境として軍部への協力姿勢には強いものがあった。しかし、戦況が悪くなるにつれ、強い統制経済下における物資不足と偏在による物価高騰、出征による人員不足(労賃の値上がり)により、善通寺の主たる事業となっていた土木工事や建設事業の予算に増額が相次いだ²⁷⁾。その後、昭和20年2月に香川県下(観音寺町沖合)で初めて空襲があり、四国内の連隊の中心にあった第11師団地の善通寺も、本土決戦や防空訓練など臨戦態勢となる。しかし、結果的には昭和17年1月に国内で初めて開設された善通寺捕虜収容所(終戦時にはアメリカ将校・准士官以下544名、イギリス404名が収容されていた)の存在により戦災を免れ、昭和20年8月終戦を迎える。これに伴い軍隊は解体され、第11師団は終焉を向かえる。

4. まとめ

以上を踏まえ、ここでは陸軍第11師団設置が善通寺の都市形成に及ぼした影響を総括し、考察を述べる。

第一に、善通寺の近代的都市化は軍事を第一義とする権力思想によって強力に押し進められたことがあげられる。軍事輸送を十全に果たすための広幅員道路や讃岐鉄道の拡充、騎兵訓練を考慮した琴参電鉄の路線計画変更など、師団の軍事活動を中心に据えた空間整備の歴史が明らかとなった。さらにこれら空間的近代化を促した行事として、大正11年に行われた「陸軍特別大演習」が相当し、特に善通寺における鉄道機能の転機として解される。一方、これら善通寺の空間整備と同時に、遊廓の設置や師団兵の生活に即した商工業の発展など、師団の設置が門前町であった善通寺の産業構造を大きく変化させたことも明らかとなった。

第二に、師団によってもたらされた空間改変と産業構造の変化は、善通寺に他地域と異なった軍都独自の社会システムを形成させたと考えられる。これは昭和金融恐慌による直接的な影響を受けなかったことや、軍事体制の拡大・縮減が善通寺の情勢を左右した最も大きな要因であったことから明らかといえる。

第三に、師団による善通寺への影響には住民ごとに較差が存在していたことが明らかとなった。師団設置に関われなかった善通寺村西南部の住民は、土地の官有地化によって逼迫した村の地租財政の犠牲者として急激な近代化プロセスに埋もれていったと解釈できる。同住民の遊廓地請願は「師団兵舎から近すぎる」という軍部優先の理由から一蹴されたことは既に見てきたとおりである。しかし、ここで留意すべきは、師団に依存しきっていた過去の善通寺を振り返り、師団の存在を外在化する、つまり善通寺の都市形成自体を客体化して上記史実を再認識する重要性である。今日、平和を手にした我が国が忘れてはならない軍事的統制思想の危険性に加え、強権的な都市空間操作の悲劇としてこの史実を捉え直すべきではないか。

謝辞 本稿を執筆するにあたり、陸上自衛隊第2混成団善通寺駐屯地広報室、善通寺市立郷土館、及び「善通寺市史」編さん室元室長の吉岡伝三郎氏に史料収集およびヒアリング調査にご協力頂いた。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 星野裕司, 小林一郎: 明治期の砲台跡地にみる土木遺産の保存・活用について, 土木史研究 No. 21, pp89-100, 2001 年
- 2) 日高直俊, 手塚慶太, 福井恒明, 篠原修, 天野光一: 首都圏における飛行場と都市計画, 土木史研究 No. 22, pp281-290, 2002 年
- 3) 日本建築学会四国支部: 過去からの遺産を明日へ調査研究「過去からの遺産(旧陸軍善通寺市第11師団の建築施設群)」, 日本建築学会四国支部, 1999 年
- 4) 善通寺市立図書館: 善通寺市史 第二巻, 善通寺市, pp316-319, 1988 年
- 5) 同上書「善通寺市史第二巻」, 善通寺市, pp432, 1988 年
- 6) 香川県統計書 大正十年, 香川県, p13, 1921 年
- 7) 陸上自衛隊第13師団司令部・四国師団史編纂委員会: 四国師団史, p31, 1972 年
- 8) 防衛庁戦史資料室史料 陸軍省貳大日記(明治29年2月)コピー, 吉岡伝三郎所蔵
- 9) 善通寺市史教育委員会・市史編さん室: 善通寺市史 第三巻, p859, 1994 年
- 10) 同上書「善通寺市史 第三巻」, p548, 1994 年
- 11) 「香川新報」明治二十九年七月二十六日号(前掲「善通寺市史 第三巻」, 善通寺市, p866, 1994 年)
- 12) 前掲「善通寺市史 第三巻」, p866, 870, 1994 年
- 13) 香川県史 第三篇上, 宮脇開発堂, pp57-60, 1910 年
- 14) 前掲「善通寺市史 第三巻」, pp817-818, 1994 年
- 15) 前掲「善通寺市史 第三巻」, pp822, 1994 年
- 16) 前掲「善通寺市史 第三巻」, pp826-830, 1994 年
- 17) 四国鉄道75年史編さん委員会編: 四国鉄道75年史, 日本国有鉄道四国支社, pp22-23, 1965 年
- 18) 琴平参宮電鉄株式会社社史編さん委員会: 六十年史, p29, 琴平参宮電鉄株式会社, 1971 年
- 19) 前掲「善通寺市史 第三巻」, p169, 1994 年
- 20) 香川県高等学校教職員組合: 戦跡を歩く 教室で平和を語ろう5 善通寺, p14, 1996 年
- 21) 前掲「善通寺市史 第三巻」, pp876-882, 1994 年
- 22) 「香川新報」明治三十一年七月十三日号、同十四日号
- 23) 前掲「善通寺市史 第三巻」, pp240-242, 1994 年
- 24) 前掲「善通寺市史 第三巻」, pp240-245, 1994 年
- 25) 第十一師団歴史 第二巻(自大正六年至昭和六年), 三月二十八日, 四月十六日, 四月二十四日~二十六日, 五月一日~三日(コピー), 吉岡伝三郎所蔵
- 26) 前掲「善通寺市史 第三巻」, pp980-985, 1994 年
- 27) 前掲「善通寺市史 第三巻」, p366, 1994 年